

「人財と現場力(技能・技術力)」

～ 企業の持続的成長の源泉 ～

代表取締役社長

三田 敏雄

Toshio Mita
President & Director



新しい年2007年を迎えました。今年はいよいよ「2007年問題」いわゆる「団塊の世代の大量退職問題」が始まる年であります。

700万人にものぼるといわれる団塊世代が一斉に引退することにより、例えば、製造業では「モノづくりの現場を支えてきたベテラン技能職の退職により、技能の伝承が途絶え、日本の製造力が衰える」などということが懸念されています。現場技能、技術をどのように次世代に伝えていくかは電力業界にとっても他人事ではありません。

「日本企業の強さの源泉は現場力である」とよくいわれます。しかしながら、昨今、今までの日本では信じ難い事故が多発し、日本社会の各所において現場力が弱ってきていることの表れではないか、と思われれます。

少子高齢化社会を迎え、若者たちの理科離れ、さらにはフリータ、ニートの増加など、現場力弱体化の要因は枚挙にいとまがありません。現場力の前提には、長期雇用があります。ニート、フリータの増加はその前提が崩壊するということでもあります。

資源のない日本が21世紀にも、長期的かつ持続的に成長するためには、優れた人財と技術力を持たなければならないと私は考えています。

電気事業のようにライフサイクルの長い事業では、10年以上先を見据えた投資や技術開発を考えなければなりません。安価で品質の良い電気をお客さまにお届けすることは、当社にとって普遍的かつ公益的的使命であります。

この使命を達成するためにも、人財と技術開発への投資を継続的に行っていくことが大変重要であると考えています。人財と技術に共通すること、それは「長期的な視点」に立たなければならない、ということです。ここで思い起こされるのは、諸子百家で法家思想の祖ともいわれる管子の言葉です。

一年の計は穀を樹うるに如くはなく
十年の計は木を樹うるに如くはなく
終身の計は人を樹うるに如くはなし

人も技術も一朝一夕には育ちません。技術や知識、能力というものはある程度時間をかけて蓄積していかなければモノになりません。だからこそ人財や技術開発に資金、時間をかけ、目前の効果は見えなくても、将来において必ず成果がでると強く信じて努力していくことが重要なのです。

先ほども触れましたが、私は世の中全体の技術レベルが低下している、技術継承がうまくなされていないのでは、と感じています。当社にとっても「技術継承」は大きな課題であります。

ベテランが持つ目には見えない技能や技術つまり「暗黙知」と呼ばれる技を誰でも見えるオープンな「形式知」に変えて技術継承することは当然のこととは言え、それには限界があります。人は「心」で動きます。どんなに立派なシステムやマニュアルを作っても、それを実践するのが人である以上、最も大切なのは「心を引き継ぐ」ことではないでしょうか。私自身も時には厳しく先輩に教えられましたが、まさに「背中を見て学ぶ」言葉どおり、新たな力を自分の中に生みだして成長してこれたという思いがあります。

当社は創立以来、経営の根幹を揺るがす数々の苦難に遭遇してきました。「伊勢湾台風による甚大な被害」「2度にわたるオイルショック」など、未曾有の危機に直面しましたが、何とか乗りきってまいりました。この中心的な役割を担ったのが、公益事業に携わる者としての強烈な「使命感」と「熱き心」を持った人財、そしてそれに支えられた現場力でした。

真の技術継承とは何か、それは単に技能・技術を継承することではなく、仕事に取り組む姿勢、情熱、責任感、いわば世のため人のためにお役に立つという企業の使命を果たすために諸先輩が培ってきた「熱き心」を正しく伝える、これが真の技術継承だと思います。

いつの時代においても、「人財と現場力」は、企業の持続的成長の源泉であり、長期的な視点で強化していかなければならないものと考えています。